出土品をどう魅せるか

～ 山梨県埋蔵文化財センターの取り組み ～

山梨県埋蔵文化財センター　　野代 恵子

１　はじめに

「文化財」という言葉はよく耳にするかと思いますが、「埋蔵文化財」という言葉は耳慣れないかも知れません。当センターでは、この「地下に埋蔵された文化財」の調査研究を行うとともに、この「埋蔵文化財」を介して広くみなさまに地域の歴史を知ってもらうための仕事をしています。「埋蔵文化財」は、その土地にあった過去の人々の暮らしに関する極めて多くの情報を内包していますが、私たちは現場検証のような発掘調査を経て、遺構や出土品等から様々な情報を収集し、それらを分析・解釈していきます。この結果、地域のストーリーがよみがえっていくのです。しかしながら、ただでさえ難しそうな字面の「埋蔵文化財」、なかなか興味を持ってもらうことが難しく、どうしたら一般の方々の「これって何だろう？」という気持ちを捉えられるのか試行錯誤を重ねてきました。近年はその面白さをより知ってもらえるような工夫や、身近に、また親しみを感じてもらえるようなひとひねりを加えた活用事業を展開してきました。ここではその内容を報告し今後の視点についても考えます。

２　山梨県が実施している埋蔵文化財活用

埋蔵文化財の活用を担う機関として県には、当センターと山梨県立考古博物館があります。考古博物館は利用者が来館する形で、当センターは職員が出張する形で役割分担をしつつ埋蔵文化財の活用を図っています。このほか「山梨の自然と人」を基本テーマとする山梨県立博物館にも埋蔵文化財の展示等があり活用が図られています。当センターがこれまで実施してきたものには体験型活用事業、教育現場等への支援事業、埋蔵文化財調査の成果公開（展示会・シンポジウム・講演会等）のほか、近年は遺跡ツーリズムの観点から文化財ウォーキングイベントなども開催しています。また、令和３年度からはバイふじのくに文化財交流事業として山梨県と静岡県が共同で埋蔵文化財に関する展示やイベントを実施する取組みを始め、令和５年度は山梨・静岡・長野・新潟の４県が連携し山の洲（くに）文化財交流事業として実施しています。このように様々な形で埋蔵文化財の活用を進めてきましたが、ここでは特に新たな視点で実施してきたものについて紹介します。

（1）マチナカ博物館

県内の出土品を、駅前など多くの集客が期待できる場所に出張展示し、興味がある方にもそうでない方にも本物の出土品に気軽に触れてもらえる場をつくることにより、本県の埋蔵文化財がもつ価値を伝え、郷土への愛着を育む機会を提供するとともに、特色ある本県の魅力を発信することを目的として実施しています。

①　in 重要文化財 旧睦沢学校校舎（甲府市藤村記念館）

夏休みのお盆期間中に甲府駅近くで開催。縄文土器（水煙文土器・一住居内から出土した土器群）の出張展示や水煙文土器のハンズオン・展示土器モチーフの文様付け体験等で縄文王国山梨の魅力を発信。併せて新潟県立歴史博物館にもご協力いただき、火焔型土器の展示やヒスイのハンズオン、火焔型土器のパーツである鶏頭冠把手作りを実施いただき、山の洲文化財交流事業の側面も持たせることで、来場者には当県地域と新潟県地域との縄文文化の違いも体感していただきました。

②　in 史跡 甲府城跡

LLC まちづくり甲府からのお声がけをいただき、同社が企画した甲府中心市街地活性化に係る取り組み「甲府のゆたかな WEEKEND2023@甲府市中心街 ～まちなかをつかって遊ぼう！」と期日を合わせて９月に開催。来場者には出土瓦の実物を見て触ってもらい、これと関連する出土瓦の刻印ストラップのワークショップの他、城内をめぐるナゾトキのルート中に普段は機能させていない鉄門内の石落としを利用したワークショップを入れ込むなど、この日限定の体験を提供する中で甲府城と城下町について現地で楽しく知っていただきました。また日頃城内で来訪者に甲府城跡の魅力を伝えているボランティア団体である甲府城御案内仕隊のみなさまには計画段階から当日までご協力いただきイベントをともに作り上げました。

③　in 金精軒製菓 韮崎店

金精軒製菓株式会社から県内の縄文土器をイメージした商品開発の監修依頼があったことから、販売店舗において商品「土器ドキ!シュー!」のモデルとした水煙文土器や石器の実物展示、関連ワークショップ（「星フルコハクトウ」の材料である寒天を黒曜石剥片で切る体験・水煙文土器デザインのカップスリーブ作り）を行いました。縄文フリークの方々は勿論のこと、歴史に興味はないけれどスイーツ好きの方々などにも、店内に展示した実物土器・石器を見ていただき、埋蔵文化財との自然なふれあいの場を創出することができました。

［写真1］マチナカ博物館①
旧睦沢学校校舎内の出張展示のようす。

［写真2］マチナカ博物館②
鉄門の石落としについて解説。
ここでのミッションは、紙製の石を落としてみること。

［写真3］マチナカ博物館③
縄文土器や石器を出張展示。
この日の店内は、和菓子と縄文土器・石器が一緒に並ぶ不思議な空間に。

（2）教育現場等への支援事業

県内の学校等を対象とした「出前支援事業」で先生方の授業づくりを支援する事業を行っています。通常は、出土品のハンズオンや縄文土器作り（粘土練り・成形・焼成）、勾玉作り、火起こし体験などを実施しています。

① 山梨学院小学校（学校主催の 2023Culture Festival（1～6 年生混合活動）における縄文王国チーム支援）

学校主催の文化祭「2023Culture Festival」での発表等を目標に学校側との打合せを重ねた上で、2 週間に渡り山梨の縄文時代に関する出前支援を実施。メンバー構成は 1～6 学年 34 名（6 年 4 名、5 年 7 名、4 年 6 名、3 年 8 名、2 年 5 名、1 年 4 名）。考古博物館見学から始まり、本物の縄文土器・土偶・石器等のハンズオン、石鏃作り、縄文原体作り、ミニ土器・土偶・土鈴作り、縄文遺跡の発掘体験（北杜市坐場遺跡　協力：北杜市教育委員会）などの様々な活動を通じて山梨の縄文時代に関する知識を習得し、児童一人一人が「私のイチ推し」を見つける中でレポートを作成、それを基にテーマごとのグループに分かれ発表内容を検討・作成し、活動の集大成として発表会を行いました。発表会当日は教室をミニ博物館に見立て、本物の縄文土器等の展示コーナーを設けるなどする中で、来場者に対して各展示担当の子供たちが工夫を凝らした解説を行い、職員はこれを見守りました。各自、興味を持った内容について本格的な解説や発表ができていました。2 週間、縄文漬けの日々を過ごした子供たちでしたが、各場面で本物に触れた際の目の輝きがとても印象的でした。なかなかマニアックな知識を身につけた子供たちは、その後も当センターが開催するイベントなどにも足を運んでくれています。

② 山梨大学教育学部（集中講義「日本史演習ⅡD」の支援）

大学との連携の試みとして例年 4 日間の日程で実施。令和 3～4 年度は、甲府城及び石切場の観光資源・教材化や甲府城をどう整備するか等をテーマとし、講座・現地踏査の上でグループに分かれて、甲府城跡と愛宕山石切場跡を中心に、周辺一帯を巡る際に効果的な動線及び観光案内サイン計画案等を作成、発表を行いました。また令和 5 年度は「山梨県の遺跡」をテーマとし、講義や考古博物館等見学を踏まえて考古博物館の展示案内（案）を作成。最終日には、山の洲文化財交流展関連イベントで実際に学生が展示案内をするとともに、ハンズオンやワークショップの補助を行いました。将来教員を目指す学生に埋蔵文化財を深く知ってもらうと同時に、地域学習の教材としても活用できることに気付いてもらう機会となりました。また実際に展示案内等を自身で行うことにより、わかりやすく伝えるためにはどのようなツールがあるといいかなど学生からの提案もありました。

③ 社会福祉法人さかき会 障害福祉サービス事業所みらいコンパニー（通所者メンバーのアート活動支援）

事業所では、メンバーの方々が育てたホップを使ったオリジナルのクラフトビールを販売していましたが、これに縄文時代のエッセンスを加えアップデートした商品開発のお手伝いを行いました。このクラフト発泡酒「縄文のゆらめき」のラベル作成に際し、「メンバーのアート活動を通じてデザイン素材を作り出したい」という事業所からのご相談を受け、本物の縄文土器や土器片を事業所に持ち込み、メンバーさんに見て触れてもらうことで縄文時代にインスパイアした多くのデザイン素材が生まれました。この素材を元に、事業所所在地である南アルプス市出身の芸大生らがラベルデザインを行いました。一連の取り組みを通じて、メンバーの方々のみならず、

事業所職員の方々にも山梨の縄文文化を知り興味をもっていただく機会となっています。

［写真 4］① 山梨学院小学校
本物の縄文土器を教室内に展示し、子供たちが自分の言葉で解説。

［写真 5］② 山梨大学教育学部
学んだことを元に、縄文服を身につけて来館者に見どころを解説。

［写真 6］③ みらいコンパニー
約 5,000 年前の縄文土器や土器片を見ながらイメージを膨らませ、多くのデザイン素材が生まれました。

（3）遺跡ツーリズム（ウォーキングイベント）

平成 30～令和 2 年度は「てってっ！やまなし古墳お宝マップ」を作成し遺跡ツーリズム「私を古墳につれてって」を、令和 3～5 年度は中世の城や居館、武将に焦点をあてたマップ「やまなし城・居館めぐりのススメ」を作成し遺跡ツーリズム「へ、いかざー！城知ろ探検隊！」を開催しました。県下全域の埋蔵文化財をはじめとした文化財の活用を図り、地域の歴史文化や文化財の再発見と普及につながっています。コロナ禍でイベント開催について制限のある中でしたが、広く県内の参加者がありツーリズム人気がうかがえるところです。

（4）山の洲文化財交流事業

中央圏域の文化財を活用した観光促進活動の一環として内閣府地方創生推進交付金を財源として実施。初年度である令和 3 年は山梨県と静岡県、令和 4 年度には長野県が加わり、さらに令和 5 年度は山梨・静岡・長野・新潟の 4 県連携で実施。各県の特徴的な埋蔵文化財等を比較展示し、講座や関連イベントにより理解を促すことによって各県のもつ歴史や地域への理解を深めることを目的としています。当センターでは静岡伊勢丹、アピタ静岡店、静岡県立美術館等で出張展示やハンズオン、ワークショップを行い、山梨県の埋蔵文化財や、日本遺産「星降る中部高地の縄文世界」（平成 30 年度認定）の PR 活動等を行っています。令和 5 年度は、県内で開催した関連イベントに際して新潟・静岡県の各ブースを出していただくなどの連携をはかっていますが、これらは県内にとどまらない多方向への埋蔵文化財の魅力発信の機会となっています。

［写真 7］遺跡ツーリズム
勝山城跡（都留市）の内堀箇所で説明を受ける参加者。

［写真 8］山の洲文化財交流事業
山梨の縄文土器、静岡の弥生土器を比べてもらいました（アピタ静岡店）。

［写真 9］山の洲文化財交流事業
考古博で開催した山の洲交流展コラボイベントでは、静岡ブースで茶道具のハンズオンを実施。同時にお茶会も。

3　埋蔵文化財活用の課題とポテンシャル

以上のように、埋蔵文化財を一般の方々により興味を持ってもらうため、また地域ならではの資源としてその本質的な価値を失わせることなくブラッシュアップし、より広く知ってもらうきっかけを創出するため、当センターでは多角的に、また様々な方法でアプローチをしてきました。その中でもやはり、出土品がもつ本物の存在感こそが、私たちが行う活用の真骨頂です。本物をどのように伝えるか、また、あまり興味のない方々と出土品をどのようにマッチングさせるかが課題のひとつであります。普段は博物館の展示ケースの中に厳かに収まっている、ある種近寄りがたい存在の出土品ですが、その価値や存在感をもっとラフに広く世間の方々と出会わせることができないか… という思いから生まれたのが出土品関連ノベルティです。私たちはイベント等において、出土品に直に触れた方々が、その瞬間に心が動く様子を数多く見てきましたが、そのたびに思うのは、その感動

を是非ともお持ち帰りいただき身近に置いてほしい、周りの方々にも伝えてほしい、ということでした。これを叶えられる方法のひとつがノベルティ開発です。その一例として、山梨の豊かな縄文土器文様を利用して製作したカップスリーブがあります。これは山梨県の伝統工芸品である西嶋和紙と県内遺跡出土の縄文土器文様とをコラボさせ、加えて土器という器の機能も再現させたものです。味気ないカップもこれを付けることによっておよそ 5,000 年前の縄文土器デザインをまとった器に変身します。文様デザインは「YAMANASHI DESIGN ARCHIVE」（県産業技術センター）でデジタル化されたものを使用し 10 種類のデザインで製作しました。縄文土器ハンズオンイベントにおいては、このスリーブのデザインモデルの土器を実際に見て触ってもらい、その感動をノベルティとしてお持ち帰りいただきましたが、これは SNS などでも大きな反響がありました。また、このスリーブは、第 52 回 山梨広告賞の印刷物の部セールスプロモーション部門で優秀賞を受賞しています。

この取り組みと同様の考え方に基づき、監修依頼等を受けて形になったものには、縄文のゆらめき（ニワトコ入り発泡酒）、縄文もよう×西嶋和紙（一筆箋や懐紙）、土器ドキ!シュー!（水煙文土器モチーフ）、星フルコハクトウ（黒曜石や水晶をイメージ）があります。いずれも具体的な出土品に関連した山梨ならではのコンセプトで商品化されたものであり、地域のストーリーを語るメッセンジャーとして数多くの方々の元に旅立っています。これらグッズ等が人々と埋蔵文化財の橋渡しとなり、埋蔵文化財に関する興味や親しみの輪が広がっていくという効果は大きく、ファンの裾野を広げるためにはこのような取り組みも有効な手段のひとつだと考えています。

［写真 10］山梨大の学生によるハンズオン
普段は触れない出土品に触れて見て知る。
「こんなにザラザラなんだ…」

［写真 11］縄文カップスリーブ
出土品を見て得た感動を記念に
お持ち帰りいただくノベルティ。

［写真 12］縄文カップスリーブ解説
台紙にはデザインモデルの土器情報を。
「ぜひ本物を細部まで見てみてください」

［写真 13］「縄文のゆらめき」
県内の縄文遺跡からも発見されている
ニワトコをブレンドしたクラフト発泡酒。

［写真 14］「土器ドキ!シュー!」
酒呑場遺跡(北杜市)出土土器
の円環状のモチーフを再現。

［写真 15］縄文もよう×西嶋和紙
伝統工芸品である和紙の質感は素朴
な手触りの土器文様ともなじみます。

4　おわりに

どんなによいもの素晴らしいものであっても、まずはその存在を知ってもらわないことには話は始まりません。埋蔵文化財は一般的にはわかりにくい存在かも知れませんが、地域の歴史の語り手としては最上級のポテンシャルを持っています。発掘調査が終わると遺構の実物を直接見ることは難しい状況となりますが、その一方で土器などの出土品は、必要あれば実物をほぼ目にすることができます。地域の特性を如実に表す出土品は、まさに地域資源そのものです。しかしながら、出土品そのものは割と寡黙で多くを語らないことから、わかりやすく見せるための工夫も必要となります。また、この資源を活かすためには、行政の文化財部局だけではなく、今地域に暮らす方々と協働してその魅力を発信していくことが必要であり、当センターでは近年、試験的にそのような機会を増やしてきました。こうして埋蔵文化財の理解者を増やすことはそれを守ることにもつながっていきます。

出土品や遺跡からいかに真実を引き出して地域のストーリーを魅せるか…　それを地域に向けていかにプロデュースしていくか…　これは私たち文化財専門職員が担うべき大きな役割ではないかと思っています。